



報道現場の IT

■ 橋谷 能理子

テレビの、それも報道という分野で仕事をしていると、伝える情報の鮮度が最重要だ。気象に関するニュースだと、今この瞬間、どこに警報が出ているかを伝えなければならないし、緊急地震速報など、秒単位の状況をつかむことが必要な時もある。また世界に目を向けると、重要な会議で合意に至ったか、あるいは決裂したか、また、人質が拘束されているような状況では、その安否確認など、ギリギリまで情報の確認をする。そういう点で、今や私の仕事は IT なしには成り立たない。

しかし、私が地方のテレビ局に入社した約 30 年前は、仕事の仕方がまったく違っていた。外にいる記者からの原稿は、公衆電話で記者が読み上げ、それを局内にいる私たち新入社員が原稿用紙に必死に書き取っていく。少し離れた現場で起きた事件の取材 VTR は、支局員が鉄道に寄せ、それを本社から駅まで取りに行き、ニュースに間に合わせる。今のように原稿も映像もすべて PC で瞬時に送れる時代からすると、何とも効率の悪い、どこか牧歌的な方法だ。

このように情報のやり取りが迅速に簡単になっただけでなく、調べものという点でも格段に容易になった。「検索」という魔法の杖のおかげで、キャリア 40 年のベテランでも 3 カ月前に入社した AD でも、同じ知識を持つことができるようになった。一昔前までは「この問題なら、□□さん」「その問題は△△さん」というふうに、各フィールドの生き字引がいたが、

■ 橋谷 能理子
フリーキャスター・コミュニケーション講師

東京女子大学卒業。テレビ静岡アナウンサーの後フリーとなり、テレビ、ラジオなどで活躍。日本語教師の資格も取得し、日本語教師、コミュニケーション講師としても活動。現在はTBS系列「サンデーモーニング」に出演中。



今は誰でもその字引を持つことができる。

では、報道そのものは30年前からどう進歩したか。実はさほど変わっていない気がする。いや、むしろ有り余る情報の料理の仕方が分からず、とにかく速ければいい、多ければいいというやり方が横行しがちな分、事の本質をきちんと見極め、分かりやすく伝える力が落ちているような気さえする。キーボードを叩いて出てくる情報をつなぎ合わせて体裁を整える、いわゆるコピペのような原稿も、時に目にする。

ニュースで伝える真実は、やはり人がその場に行って、温度や空気を感じ、その目で見て、音を聴き、声を聴き、実際のものに触れることで得られるものだと思う。私自身も、たとえば東西ドイツの統一の取材では、人々が抱き合って喜ぶ喧噪に身を置き、足元に散らばるシャンパンの瓶の欠片を踏みながら、花火の匂いを嗅いで、統一の瞬間を伝えた。震災の取材では瓦礫の傍らを実際に歩き、ガス漏れの匂いを嗅ぎ、感情を必死で押し殺した人々の声を耳にすることで、災害の本質を伝えようとした。

そんな「生の感触」をいかに速く視聴者に伝えるか、その点でITの役割は計り知れないほど大きい。現場取材もITも、どちらが欠けても報道は成立しない。車の両輪だ。デスクに居ながらにして世界中の情報を得ることができるようになっている今だからこそ、「生の感触」をより速く正確に伝えることが、報道におけるITの真価だと感じるし、今後の報道の未来がそれにかかっているとも思う。

